

## 香り屋

上田 紗由美

都会の喧騒から離れた路地に、ひっそりと佇む小さな店。そこには、こんな張り紙が貼られていた。

「香り、売ります」

「はあ……」

学校の帰り道、青山夏芽はため息をついた。夏芽は中学一年生。都会のビル群の近くの、大きな住宅街にある中学校に通っている。

「暑い、なんなのこの暑さ……」

ジリジリと照りつける太陽の下、夏芽は小声で悪態をついた。アスファルトの上にはゆらゆらと立ち昇る陽炎は、夏芽の苛立ちを表しているようだった。

夏芽の中学校では、もうすぐ文化祭が行われる。学級委員である夏芽は、文化祭当日、クラス全員で何を行うか決める話し合いの司会を務めることになった。

夏芽が教壇に立ち、みんなの意見を聞いていく。出店や縁日など、いくつか案が出され、内容もまとまってきたときだった。

「なあ、もつといいやつはねえの？」

一人の男子が、馬鹿にしたような声を上げた。

「八神さん……、発言は手を挙げてからしてください」

八神旭。夏芽の幼なじみだ。クラスの中心的存在で、人気もある。だが、夏芽は旭のことが苦手だった。思ったことをすぐに口に出す旭が気に入らなかったのだ。中学校へ入学してからお互いに話すことはなかったが、同じクラスになってしまった。心底うんざりしているような表情で夏芽が言う。だが、旭は意地の悪い笑みを浮かべながら続けた。

「出店とか縁日とかそーゆーの、つまらなくね？そんなのより、お化け屋敷とかのほうがいいだろ」

「つ、ちよつと、そんな言い方はないと

思いますけど」

思わず、夏芽が声を尖らせる。さすがに酷い、と思った。

「お前ら、もつと真剣に考えろよ。さっきのつまんねー案はなし。ほら、他の案出せて——」

その言葉に、夏芽の中の何か、プチン、と切れた。

「いい加減にして！」

夏芽が声を荒げた瞬間、教室中が静まりかえった。周りを見回すと、クラスメイトたちが怯えたような様子で夏芽のほうを見ていた。あの旭でさえも、不意に突かれたような、驚いた顔をしていた。窓の外でうるさく鳴いているセミの鳴き声が、夏芽の耳にはやけに大きく聞こえた。

「……じ、どうしたんだよ」

静寂を破ったのは、旭だった。旭が言葉が続けようとした、その時。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、他の教室から話し声や椅子を引く音が聞こえた。同時に、旭はハッと口をつぐんだ。

「……これで、終わります」

ぎこちない挨拶をした後、夏芽は席へ

戻った。

「あーもう！ 旭のヤツー！」

夏芽は道ばたの小石を蹴飛ばした。あの後すぐに下校だったのはよかつたものの、夏芽のイライラは消えなかつた。自分のせいなのかもしれない、とは思っている。だが、旭のせいだ、と責任を押し付けることしかできず、悪態をついてしまふ。そんなことの繰り返しに、夏芽は自分に嫌気がさしてしまつていた。夏芽はまた大きなため息をつき、

「時間が戻ればいいのに……」

そう呟き、夏芽は天を仰ぎ見た。

その時、ふつ、と何かの香りが夏芽の鼻をかすめた。柑橘系の、夏の暑さも忘れるほどの清々しい香りだった。

「レモンの香り……？」

この辺りにレモンの香りがするところなんてあつたつけ、と夏芽は首を傾げた。香りのもとを辿ると、いつの間にか知らない路地へと入つていた。先へ先へと歩みを進めると、それに伴つてレモンの香りが強く、濃くなつていく。周りの喧騒も減つていき、やがて路地には夏芽のスピーカーの靴音だけが残つた。

路地の突きあたりにあつたのは、木造の小さな建物だった。一階建てで、いたるところにツタが絡みついていて、何十年も昔からあつたようだ。白い木のドアは少し開いていて、レモンを丸ごと絞つたような強い香りが中から漂つていた。だが、それ以上に夏芽の目を引いたのは、ドアの横に貼られてる張り紙だった。そこには丁寧な字で、

「香り、売ります」

と書かれていた。ドアを開けると、ランプのほのかな明かりに照らされている部屋が目に入つた。壁は一面棚に囲まれていて、小さな瓶がズラリと並べられている。奥にはカウンターがあり、背もたれの無い木の椅子が二つ置かれていた。

「いらつしやいませ」

澄んだ声に夏芽が振り向くと、誰もいなかったはずのカウンターに、若い女性が立つていた。肩までの長さで切りそろえられた黒髪と、目鼻立ちの整つたきれいな顔が印象的だった。笑顔だが、捉えたい雰囲気をもとつていするように、夏芽には見えた。驚き、瞬きもせず立ちすくむ夏芽を見て、女性が口を開いた。

「驚かせてしまい、すみません。私はここ『香り屋』の店主、アイリと申します。よろしくお願ひしますね」

その女性——アイリが、夏芽に向かってお辞儀をする。と、夏芽は我に返つたようにパチパチと瞬きをした。

「あの、ここつて何のお店なんですか？ さつきからレモンの香りがするんですけど」

夏芽が聞くと、アイリはカウンターの下に潜り、一本の瓶を取り出した。

「ここはその名の通り、香りを売る店です。でも、香りを売るだけの店ではありません。ここに売つている香りたちは皆『過去を変える』ことができる力を持っています」

「過去を、変える……？」

「はい。そして、お客様は『レモンの香りがする』とおっしゃっていましたね。ここにいらつしやるお客様は、この店の香りに引き寄せられてたどり着きます。ですが、その香りはお客様によつて違うのです。あるお客様はバラの香りがする。昨日いらつしやつたお客様はミントの香りがするとおっしゃっていました。珍しかったのは、胡椒の香りがするとおつ

しゃっていたお客様ですね。そのお客様は、香りに耐えきれず、店に入った途端に帰られましたか……」

夏芽は自分が胡椒の強い香りに苦しむところを想像した。

(レモンの香りでよかった)

と、胸をなでおろした。

「バラやミント、胡椒などの香りは、それぞれのお客様が持つ香りなんです。いわば個々の性格のようなものですね。そして、その香りが弱くなってくると、自分が持つ香りを嗅ぐことで香りを補充する必要があります。弱くなるのは、何か悩みを抱えていて、もう一度やり直したいと思つてるとき。お客様も、『過去に戻りたい』と思つていのではないですか？だから、ここにたどり着いたのだと、私は思います」

夏芽はドキッとした。完全なる凶星だった。「立ち話も何ですし、ぜひ座って話を聞かせてください」

アイリがにっこりと笑う。その笑顔に安堵し、夏芽はカウンターの前の椅子に座った。それから、ぼつりぼつりと話し始めた。

「私、今日クラスの男子に怒鳴ってしまったんです。しかもクラスメイトの前で。本当はあんなこと言うつもりはなかったのに。もつといい方向に進められなかったのかなって。私、そのことをなかつたことにしたいんです。だから、過去に戻りたくて……」

夏芽はそこまで言ったことで、言葉に詰まつてしまった。

「なるほど。怒鳴つてしまったことをなかつたことにしたいのですね」

アイリはどこからかハンカチを取り出し、瓶の中の液体をそれに一滴落とした。「今から過去へ戻りますが、覚悟はありますか？」

アイリの問いかけに、夏芽は目を閉じて考えた後、  
「はい」

と決意のこもつた声で返事をした。「これを鼻に近づけて、深呼吸してみてください。レモンの香りです。レモンの

香りは心の動揺を鎮める効果があるので、落ちつくはずですよ」

夏芽は言われた通り、手渡されたハンカチを鼻に近づけた。途端、レモンの香

りが夏芽の鼻先から体の隅々まで巡つた。その香りは、さんさんと照る太陽を思い起こさせ、それでいて優しい感じで、夏芽を不思議な感覚にさせた。しだいに夏芽の意識はまどろみの中へ落ちていく。「いつてらっしやいませ」

そう呟いたアイリの声を最後に、夏芽の意識は暗闇の中へ落ちた。

夏芽はざわざわとした空間の中で目を覚ました。ここはどこだろう、と周りを見回そうとして、夏芽は違和感を覚えた。「これ、過去に戻つてる……？」

夏芽がいたのは、学校の教室だった。しかも、夏芽は教壇の上に立ち、チョークを持って黒板の方を向いていた。黒板には夏芽自身が書いたのか、「文化祭の案 一、出店 二、縁日」と書かれていた。

「なあ、もつといいやつはねえの？」

旭の声がした。振り向くと、やつぱり旭が意地の悪い笑みを浮かべ、ニヤニヤしていた。夏芽の脳裏には、アイリの言葉が浮かんでいた。

「ここに売っている香り達は皆、『過去を変える』ことができる力を持っています」

アイリの言葉は本当だったのだ。夏芽は呆然とし、棒のように突っ立ったままだった。

「おーい、青山？何突っ立ってんだよ」

誰かの声で夏芽は現実には引き戻された。見ると、旭が怪訝そうに夏芽の方を見ていた。私驚いてばかりだな、と思いつつ、夏芽は旭に向き直った。

「すみません、それで、八神さん、何ですか？発言は手を挙げてからですよ」

過去を変えるなら、今がチャンスだと夏芽は思った。もう二度と過ちは繰り返さない、と。夏芽は、前よりも少し優しいニュアンスをにじませて言った。

「何かあるなら、ちゃんと手を挙げてくださいね」

「……わかったよ」

旭が大きいため息をつき、何か言いたげな顔をしたが、すぐに黙りこんだ。これで怒鳴ったことをなかつたことにできた。夏芽はほっとし、肩の力を抜こうとした。

（本当にこれでよかったの？）

そんな声が、夏芽の脳裏をかすめた。（いいの。なかつたことにできたし。

旭も静かにしてくれたから）

夏芽はそう思い、頭の中に響く声をかき消そうとした。

（旭は何か言おうとしていたよね。それを無視していいの？）

その声は、夏芽の頭の中に、説得するように響きわたった。

（……そうだ。私、何やってるんだろ）

その途端、夏芽はモヤモヤが吹っ切れた様子で、

「八神さん、いや旭！言いたいことあったんでしょ。言ってみてよ！」

凜とした声で言い放った。その声は、波のように広がり、教室中を一瞬で静かにさせた。夏芽が怒鳴ったときのような静寂ではない。まるでレモンの香りのような、爽やかに澄み切った空気が教室を包み込んだ。

「はっ？何言ってる」

旭はあつけにとられた顔をした。

「私、旭のことが正直苦手だった。でも、それだけの理由で意見を無視するなんて駄目だよ。ごめん、旭」

夏芽が申し訳なきように頭を下げた。教室は夏芽と旭だけの空間になったよう

に静まり返った。

「……いいよ、別に」  
「えっ」

「俺も、ごめん」

旭は気まずそうに頭をかいた。

「俺、口下手だからさ、つい言葉がきつくなるんだよ。夏芽のおかげで気づいた。本心をそのまま伝えるだけでは、傷つく人がいるってこと。ありがとな、夏芽」

優しく顔をほころばせて、旭は夏芽に

伝えた。それは、中学校に入学してから

見ることのなかった、夏芽が一番好きなき表情だった。それに応えるように、夏芽も曇りのない笑顔を見せた。

「やっぱり変わってないね！旭の正直なところ」

「うるせえ」

そう言っ、二人は笑い合った。

「ちよつと二人とも、いい雰囲気悪いんだけど、文化祭の案は？」

クラスメイトから困惑した声がかかる。二人が振り向くと、クラスメイトたちが

苦笑いをしていた。それに驚き、二人は同時に顔を見合わせた。それが二人のツ

ボにはまったのか、間髪入れずにまた笑

い出した。クラスメイトからも笑いの声  
が上がり出し、教室は笑いの渦に包まれた。  
キーンコーン、と授業の終わりを告げ  
るチャイムが鳴る。それは、失われてい  
た二人の友情の始まりを告げているよう  
だった。

「おかえりなさいませ」

夏芽はアイリの声で目を開けた。夏芽  
の目の前には、過去に戻る前に持ってい  
たハンカチが、カウンターのの上に無造作  
に置かれていた。夏芽は椅子に座ったま  
ま眠り、過去へ戻ったようだった。ゆっ  
くりと夏芽が上体を起こすと、アイリが  
話しかけた。

「どうでしたか？お客様のお望みは叶え  
られましたか？」

すると、夏芽は椅子に座り直して答えた。  
「はい。怒鳴ったことをなかつたことに  
できました、私、気がさされたんです。旭――  
怒鳴ってしまった男子は一生懸命考えて、  
行事を楽しくしようとしていたんだって。  
自分が苦手だというだけで、ずっと意見  
を無視していたんだって。これからは  
偏見で判断せず、相手の内面に向き合っ

ていこうって、改めて思いました」

夏芽がまっすぐに思いを伝えると、ア  
イリは満足げに微笑んだ。  
「よかったです。今まで気づかなかつた  
ことに気づけるのは、とてもいいことだ  
と思いますよ」

そう言いながら、アイリは小瓶を布に  
包んでいく。巾着袋のような形にした後、  
口の部分をリボンで結んだ。

「どうぞ。レモンの香りが入った瓶です。  
元気が出ないとき、今日のように使つて  
みてくださいね」

「あの、今お金持っていないんですけど」  
「大丈夫ですよ。お代は『お客様が望み  
を叶えること』ですから」

アイリが夏芽に袋を渡した。  
「あ、ありがとうございます」

夏芽はそれを受け取つた後、立ち上  
り、店のドアに手をかけた。

「あ、お客様」

アイリが夏芽を呼び止める。

「最後に、少しお伝えしたいことが」  
「何でしょう？」

「……この店に来ることができるとは、  
一回限りです。香りの瓶があつても、こ

こでしか過去に戻るお手伝いはできない  
ので、二度と過去には戻れません。それ  
でもよろしいですか？」

夏芽は「そうなんですか」と少しうつ  
むいたが、すぐに晴れやかな笑顔に戻つた。  
「大丈夫です！過去に戻れなくても、未  
来は自分で変えることができますから」

夏芽の前向きな言葉を聞き、アイリは  
微笑んだ。まるで体の内側から灯がともつ  
たような、温かな表情だった。

「それなら心配はありませんね。……で  
は、ありがとうございます」

アイリが夏芽に向かって頭を下げた。  
夏芽も軽く会釈をした。

「ありがとうございます」

そして、ドアを開けた。

帰り道、夏芽はアイリにもらつた袋を  
開けてみた。すると、中には小瓶と、青  
色の花が描かれたしおりが入っていた。  
しおりの裏には何か書いてある。そこに  
は、こんな文面があつた。

「絵はアイリスの花です。私の名前、ア  
イリの由来でもあります。アイリスの花  
言葉は、『友情』です。お二人の友情が

ずっと続くよう、祈っています。

香り屋店主 アイリ

夏芽はそれを読み、口元に優しい微笑を浮かべた。ふっ、と息をつき、空を見上げる。空はすでに真っ赤に染まり、太陽が沈みかけていた。

「よし、頑張ろう！」

夏芽は家に向かって力強く歩き始めた。

その後、文化祭では、旭の意見を取り入れてお化け屋敷が行われることになった。結果は大成功。大勢のお客で賑わい、大盛況だった。それから、夏芽は過去に戻りたいと思うことはなくなった。信頼できる友達との毎日は、とても充実していたから――。

都会の喧騒から離れた路地に、ひっそりと佇む小さな店。そこには今日も、新たなお客が訪れる。

「いらっしやいませ。『香り屋』へようこそ」